

個別的価値と社会的価値

——価値理論の展開——

山 本 二 三 丸

—
さきにわたくしは、前稿『価値理論の展開』（本誌第三十四卷第一号所載）において、科学的經濟理論における価値概念の基本的内容について説明し、さらにそれにつづく『価値理論の展開（二）』（本誌第三十四卷第二号所載）において、本質としての価値と現象形態としての交換価値との関連を的確に把握することが肝要であること、そして、これからの論究においては現象形態としての交換価値はつねに価格としてとらえられなければならないということの吟味をおこなってきた。そこで、これからいよいよ、科学的經濟理論の理論体系のなかで、価値理論がどのように展開されているか、ということを究明することにしよう。

まずはじめに取りあげられるのは、単純商品生産のもとでの価値および価値法則である。

個別的価値と社会的価値

ひとよつては、単純商品生産社会が歴史的に実在しなかったということを理由として、商品生産の法則を単純商品生産から説き始めることに異論を唱えている者もいるようである。商品生産には単純商品生産と資本主義的商品生産とがある。これらの論者は、ただちに資本主義的商品生産をとりあげるべきだと言うのである。こういう主張は、例の超論理的思考と超國語的語法とをもって世紀的「原理論」という超科学^{ウルトウ}を創造した「学者」の好んで唱えるところとなっている。だが、通常の論理的思考と國語的語法にしか通じえないわれわれとしては、右のような超論理的主張はとうてい手の届かないところである。そこで、通常の論理的思考に頼つて事柄を少々整理してみよう。

私的所有という歴史的生産関係のもとで、必然的に商品^{ウルトウ}の法則がつかぬこと、私的生産者の私的労働は、商品そのものの使用価値および価値としてはじめて社会的労働に成ることができし、また成らなければならぬことは、すでにくりかえし明らか^{ウルトウ}にされたところである。だが、私的所有には、二つの、性質を異にする歴史的形態がある。その一つは本来私的所有であり、他は資本主義的私的所有である。前者は、私的所有者が同時に労働力の担い手つまり労働者であるもの、後者は私的所有者が非労働者であるの^{ウルトウ}にたいして労働者が非所有者「賃銀労働者であるものである。生産とは、労働力の担い手が生産手段に働きかけること、つまり、労働力と生産手段という生産の二要因の結合にほかならないのであるから、生産手段を生産手段として充用する労働者がその所有者であることは、生産という概念に照らして当然の形態であり、したがつて論理的に言つて本来私的所有である。生産手段を生産手段として充用することのない非労働者「資本家が所有者であつて、労働者が非所有者である資本主義的私的所有が、本来的^{ウルトウ} (eigenlich)なものではなく、不安定 (unbeständig)なものであり、過渡的段階 (Übergangsstadium)をあらわすものにすぎないことは、同じく生産の概念に照らして自明である。だが、前者が本来私的所有であること

味は、たんに論理的に見てのことであるばかりでなく、また歴史的に見てもそのようなのである。直接的生産者つまり労働者「私的所有者の形態が歴史的に分解をとげて、一方の極に労働者「非所有者」賃銀労働者が、これにたいして他方の極に私的所有者「非労働者」資本家が生まれ、こうした対立する関係が生じたときに資本主義的私所有が成り立つのである。だから、直接的生产者「私的所有者の関係は、論理的な意味でも歴史的な意味でも、資本主義的私所有に先行する本来的私所有であるといわなければならないのである。そして、この本来的私所有のもとで必然的に貫徹する商品の法則および貨幣の法則が、その私所有のもとでの商品生産をおしすすめ、発展させて、ついにこの本来的私所有の形態をつきくずし、より高い資本主義的私所有の形態をつくりだし、単純商品生産を資本主義的商品生産へ推進したものであるから、理論的見地から見ても歴史的見地から見ても、われわれが先ず単純商品生産のもとでの価値および価値法則の意義についての考察からわれわれの論究をはじめなければならないのは、理の当然といわなければならない。

だが、われわれが単純商品生産からはじめなければならない理由としては、いまひとつ重要なものがあることを見落してはならない。それは、単純商品生産という形態がすべての歴史的な商品生産に通ずる一般的・抽象的な規定を示したものであるという点である。

たとえば、資本主義的商品生産を見てみるならば、なるほど、私的所有者「私生産者は資本家」非労働者であり、労働者は非所有者「賃銀労働者であるが、このように私的所有者と労働者とが対立する二つの人格に分かれていることは、その外部にたいして、つまり社会的に見たばあい、その私生産物が、私的所有者「労働者である直接的生产者の私生産物とまったく同じもの、つまり本来的私所有の生産関係を物的にあらわす同じ商品として、社会

的に妥当することをすこしも妨げない。簡単にいえば、資本主義的という規定は、いわば私的所有の内部的關係を示すものであって、対外的にはその規定を捨象した本来の私的所有または私的所有一般として、したがって単純商品生産と同じものとして、妥当するのである。このような、資本主義的商品生産が単純な商品生産として社会的に妥当しなければならぬということは、つぎの事情を考慮することによっても、明白となる。すなわち、資本主義的商品生産においては、その私的生産物「商品」は必ず剰余価値をふくむものでなければならぬのであって、それがたんに価値をもつばかりでなく相当額の剰余価値をふくむという点にこそ直接的生産者の生産した商品との根本的差異が認められるのであるが、他者つまり社会からみたととき、その商品が剰余価値をふくむか否かはまったく問題にされることなく、たんに価値だけをもつ商品としてのみ社会的に妥当するものとなる、ということである。資本家の生産したいわば資本主義的商品も、外部つまり社会からみれば、直接的生産者の生産した単純商品とまったく同じものとして、たんなる商品としてのみ、認められる。それゆえ、社会的にみれば、およそ生産物「商品」そのものが問題となるかぎり、資本主義的私的所有つまり資本主義的商品生産も、資本主義的という規定を捨象した私的所有一般または本来の私的所有つまり単純商品生産としてまず考察されなければならない。複雑な規定をもった形態を論究するさいには、当然、より複雑な・より高度の規定を捨象して、より簡単な・より未発展の規定をもつものとしてまず考察し、ついで論理的にただしく規定を加えていって、より複雑な形態を説明するという方法が採られなければならないのであって、これが論理的に正しい、科学的方法であることは、多言を要しないところである。だから、われわれがまず最初に単純商品生産を考察するということは、資本主義的私的所有を資本主義的という規定を一応捨象した私的所有一般または本来の所有として、したがって資本主義的商品生産を資本主義的という規定を取り去ったものとして考察

するということでもあり、単純商品生産をつらぬく諸法則は、そのかぎり、資本主義的商品生産にも妥当するものでなければならぬということを意味するものである。たとえば、マルクスは主著『資本論』第一巻の冒頭で資本主義社会の富の「原基形態」として個々の商品を、つまり資本主義的商品をとりあげて、これを分析の対象としているが、しかし、第一章から第三章にいたる間において分析されているのは、資本主義的という規定を捨象された商品であり、その意味で単純な規定をもつ商品、すなわち私的所有一般または本来的私的所有をあらわすものとしての単純商品なのである。

だが、単純商品または単純商品生産という形態またはその観念的反映としての概念は、たんに資本主義社会における商品に妥当するばかりではない。それ以前の歴史的諸社会においても、およそ労働生産物が商品形態を採るかぎり、そしてまた、その労働生産物が商品として交換される関係の範囲にかぎって、単純商品または単純商品生産の形態はりっぱに妥当するのである。

たとえば、原始共同社会をとってみよう。その基本的な生産関係は共同的所有であり、したがって、共同社会内部では、私的生産物はなく、商品はない。だが、Aという共同社会とBという他の共同社会とが接触して、それぞれの生産物XとYとを相互に交換したとすれば、そのかぎり、XとYとは商品となる。なぜならば、AとBとの二社会は、生産物XおよびYにかんして相互に依存しあい、そのかぎり、社会的必要生産物XおよびYを生産する私的生産者をあらわしているのであり、AはBにたいして私的所有者に、BはまたAにたいして私的所有者になっているからである。AはBにたいして、生産物Xにかんしてのみ、私的所有者、私的生産者であり、BはまたAにたいして、生産物Yにかんしてのみ、私的所有者、私的生産者であり、その意味において、XとYとは単純な商品であり、ここに

単純商品生産の形態が見られるといわなければならない。奴隷制社会のもとにおいても、労働生産物の一部が私的に交換されて商品となる場合には、たとえ奴隷の生産物であろうと、そのかぎりにおいて私的所有の関係が成り立つのであり、そのかぎりでも単純商品生産がおこなわれたものと考へなければならぬ。封建制社会においても、事柄はまったく同じである。そこでの基本的な生産関係は封建制的生産関係であり、農民は土地に縛りつけられて領主にたいする賦役義務を負い、手工業者もまたギルドに縛られ、貢賦義務を負っている。だが、いままし、農民の生産した小麦と手工業者の生産した農具とが交換されたとするならば、その生産物「小麦にかんして農民は私的所有者」「私的生産者」をかぎり、両者ともに直接的生産者「単純商品生産者」であって、ここには単純商品生産がおこなわれているといわなければならないのである。封建制社会では、奴隷制社会とちがって、農民と手工業者はそれぞれ生産手段の一部を所有し経済外強制はあるものの「半自由」であるため、生産力を高めることによって自己の自由に処分しうる生産物を増産することができ、かくして自家消費を超える部分を商品として交換することができ、労働生産物の商品形態は必然的に発展をとげることになり、使用価値生産に比して価値生産のウェイトがしだいにより大きくなるとともに、貨幣商品の必然的生成「流通」にもなつて、いよいよ商品形態は発展をとげ、すべての商品を支配する社会的力をもつた貨幣がついに封建的な経済外的力を圧倒するようになるのである。

以上によつて、すべての歴史的社会を通じて、労働生産物が私的に交換されるかぎり、その交換される労働生産物について、私的所有に結びついた私的生産がおこなわれ、単純商品生産の形態が存在するのであり、そこには本来的私的所有または私的所有一般によつて単純商品生産を規定する価値および価値法則が妥当するものでなければならぬ。

いこと、その意味においてもわれわれはまず単純商品生産から考察をはじめなければならないということが、明らかとなるのである。⁽¹⁾

(1) すべて歴史的社會が生成・發展・消滅・交替という運動をとげることによって、つぎつぎとより高い社會形態への發展・移行をとげてきたのは、各歴史的社會においてはその發展のある時期に、その基本的な生産關係と異なる生産關係の要素が発生し、それらの間の対立・矛盾が激化し成熟してきたことによつてなのである。もし、その基本的生産關係ひとつが支配してゐてそれがあります「純粹」になるといふのであれば、その社會のより高い社會への變革・移行は、わが世紀的「原理論」創造者の編み出した超論理的魔術による以外にはおこりようはないのである。かくて、ヘーゲルがうちたてた「矛盾における運動」といふ科學的弁証法の見地は、「ヘーゲル弁証法などロクに読みもしない」で軽く超克しつくしたわが世紀的「原理論」創造者のうちたてた超論理的「純粹」思考の前にあえなく潰れる運命におちいたのであつて、「商品・貨幣・資本は、いかなる生産過程ともいかなる生産關係ともかかわりのない純粹の「流れ通る形」である」といふ不滅の超國語的「命題」をうのみにできない者は、當然のことながら、マルクスと同じく「不純」の思考にとらわれたものとして、超科學の領域から永久に放逐されなければならないのである。

ところで、単純商品生産つまり私的生産者・私的所有者の生産關係について考察するといつても、われわれは、原始共同社會や奴隸制社會におけるような、例外的ともみられる商品生産を問題とすることは適當ではない。われわれとしては、資本主義的商品生産から資本主義的という規定を捨象した意味での單純な商品生産を考察することが當面の課題なのであるから、歴史的社會にあてはめてこれを考えるとすれば、すくなくとも封建制社會の末期、自給自足的要素の根強い残存はあるものの、労働生産物の商品形態はかなり広範にゆきわたり、使用價值生産と並んで價值生産の比重がしだいに重みを加えつつあつた段階を考えなければならぬであらう。いづれにしても、ここでは私的生産者・私的所有者は直接的生産者・独立労働者であつて、社會の存続を支える主要な生産物は私的交換に出される

商品形態をとっているということが前提となっているのである。

二

右のような前提のもとで単純商品生産を考察するならば、われわれが第一に気がつくことは、私の商品生産者はすべて個別的生産者である、ということである。労働力の担い手であつて商品を生産する直接的生産者は、各自がそれぞれ生産に必要な個別的生産手段を私的に所有し、かれ自身およびかれの家族の生活を維持し再生産をおこなうために必要な生産手段および生活手段を調達することを主要目的として労働生産物をつくるのである。そこで、自家消費に直接充てられる生産物部分を除いて、商品として交換に出される生産物部分だけについて、考えなければならぬ。

まず、労働生産物・商品を生産する個別的生産者の担っている個別的人間労働力は、当然のことながら、千差万別である。しかし、その生産物・商品のもつ価値は同じ質のもでなければならず、したがって価値の実体は、同じ質の人間の労働でなければならぬ。では、千差万別の個別的人間労働力は、その支出において、どのようにして同じ質の人間の労働として発現し、同じ質の価値として物化・対象化することができるか、そして同じ質の人間の労働として対象化しなければならぬか？——これは、まさしく、マルクスが『資本論』第一巻第一章第一節において、価値の大きさの規定を論ずるにあたって提起した問題であり、またこの問題にたいする解答の形で価値規定の内容をはじめて解明したところのものである。これについては、すでに前稿『価値理論の展開』（前出）において要約した説明があたえられているが、ここでは、単純商品生産にかんする規定として、改めてその側面から同じマルクスの叙述を

いわば把握しなす必要があるのである。というのは、右のマルクスの叙述は、単純な商品の価値規定を明らかにしたものであり、その意味において、当面の問題である単純商品生産における価値規定にたいしてまさにびったりとあてはまるものであるからである。

マルクス自身によって提起されているさきの問題にたいするかれ自身の解答は、周知のように、つぎのように示されている。

「これらの個別的労働力のおのは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他と同じ人間労働力なのである」(マルクス・エンゲルス全集、第三巻、五三ページ)。

たとえば、ここに同じ綿織物を生産する織工「独立生産者が四人(A、B、C、D)いるとして、それぞれ個別的労働力を異にし、したがってたとえば綿布一〇メートルを生産するのに必要な労働時間がそれぞれ4時間、6時間、8時間、10時間だとし、それぞれの労働の質をa、b、c、dであらわすとすれば、同じ一〇メートルの綿布のふくむ人間的労働の分量は、4a時間、6b時間、8c時間、10d時間となる。そこで、もし社会的・平均的労働の質をmとし、綿布一〇メートルの生産に必要な「社会的必要労働時間」を7m時間とすれば、すべての綿布の価値の大きさは一樣に7m時間とならなければならない。つまり、Aの4a時間は7m時間に、Bの6b時間も7m時間に、Cの8c時間も7m時間に、Dの10d時間も7m時間に、それぞれ還元されて、ひとしく7m時間の価値をもつものとしてはじめて社会的に妥当する。それゆえ、たとえある個別的生産者が何労働時間を賃やそつと、かれの生産物「綿布一〇メートルはつねに7m時間の価値をもつものとしてのみ、社会的に妥当しなければならないのであって、それゆえにこそ、マルクスは、

「だから、ある使用価値の価値の大きさを規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は、ここでは一般に、それが属する種類の平均見本とみなされる。」(前出、五三ページ、傍点―山本)

と、説明しているのである。ある種類の商品は、そのどれをとってみても「平均見本」であって、その価値は同一でなければならない。ここには同じ種類の商品についてつねに同じ社会的価値がひとつだけあるのであって、これと異なった価値または個別的価値といったものはまったく存在しない。個別的なものとしては、ただ質を異にした個別的労働時間があるだけである。

ところで、たんに社会的必要労働時間というだけでは漠然としていて、つかみどころはなく、社会的・平均的労働の質の規定としてはきわめて無内容である。しかも、それだけでは、商品生産の発展「運動が価値を中心としていかにおこなわれるかが解明されえない。そこで、マルクスは、「社会的必要労働時間」の内容を厳密に規定したつぎの命題をかかげて、右のような要請に的確に応えているのである。

「社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である」(前出、五三ページ)。

ここでとくとく注意を要するのは、ここに示された労働の質的规定と生産諸条件とのちがいと関連である。社会的・平均的労働そのものの質的规定としては、「労働の熟練と強度の社会的平均度」以外にはありえず、またこれのほかに加えるべきものはない。この質的规定が重要な意義をもっているのは、それがそれぞれ異なった種類の労働生産物「商品の価値を決定するところの、社会的・平均的労働の質を示すものであるからである。たとえば、さきの例で、

小麦を生産する農民の人間の労働と農具を生産する手工業者の人間の労働とは、ともに同じ質の労働として、「労働の熟練と強度の社会的平均度」のものとして、同じ質の価値に対象化するのである。そして、単位生産物「商品」にふくまれる社会的・平均的労働の分量を規定するものとして、生産主体である人間の労働のほかに、それぞれの生産部門における「社会的・標準的な生産諸条件」が外部から——まさしく「条件」として——加わってくるのである。

「労働の熟練と強度」とについていえば、熟練は人間労働力を支出して一定の作用・効果を生みだすさいの効率の良し悪しまたは要領のよしあしを指したものであって、支出する労働の密度とその分量にはかわりのないものである。つまり、同じ密度、同じ分量の人間の労働の物化「対象化する生産物の量が労働の熟練度のいかんで異なるもの」であり、したがって一単位当りに対象化する同じ密度の労働分量が異なるのである。労働の強度は単位時間に支出する人間の労働の密度を示し、したがって労働力の担い手にとっての負担の大小を直接に示すものであるが、これにたいして労働の熟練度は労働力の担い手にとっての負担にはいっさいかわりあいはない。労働の生産力とは、同じ密度、同じ分量の人間の労働をもってつくりだされる生産物量の増減を示すものであり、したがって労働者の負担は同じである。ただ、それによって単位生産物に対象化する人間の労働の量がちがいがい、したがって一商品の価値の大きさがちがってくるのである。

「労働の熟練および強度の社会的平均度」は、それぞれの商品生産社会においては与えられたものとしてあるのであって、それゆえにこそ、その社会での労働生産物「商品の価値」による交換がおこなわれるのである。マルクスは、資本主義的商品生産の支配的におこなわれる資本主義国をとって、

「どの国にも一定の中間の労働強度として認められているものがあって、これよりも低い強度では労働は商品の生

産にさいして社会的に必要な時間よりも多くの時間を費やすことになり、したがって正常な質の労働には数えられないことになる。与えられた一国では、労働時間のたんなる長さによる価値の度量に変更を加えるものは、ただ国民的
平均よりも高い強度だけである。⁽²⁾」(前出、五八三—五八四ページ)

と述べているが、ここに示されている「一定の中位の労働強度」なるものは、単純商品生産の段階においても、商品交換の関連によって結びつけられた社会的範囲全体にわたって、やはり「認められているものがある」と考えられるのであって、このことは、あとでかけられるはずのエンゲルスの叙述によっても、明らかであるといつてよい。

(2) ここに「価値を規定するものとして問題になる」のは、「国民的平均よりも高い強度だけ」だと述べられているのは、その社会の存続・発展を支えるものとしての人間の労働のあり方、その質の高さを示したものである。「国民的平均よりも低い強度」の人間の労働は、労働力の再生産費以上の剰余生産物(＝剰余価値部分)を相当額つくりだすものとなることができず、したがって、その社会を支える人間の労働として価値を規定する社会的労働にはなりえないのである。なお、右の引用個所につづいて、マルクスは、

「個々の国々をその構成部分とする世界市場ではそうではない。労働の中位の強度は国によって違っている。それは、この国ではより大きく、あの国ではより小さい。これら種々の国民的平均は一つの階段(eine Stufenleiter)をなしており、その度量単位は世界的労働の平均単位である。」(前出、五八四ページ)

と述べ、「価値法則の修正」を説明したあと、ひきつづき、

「ある一国で資本主義的生産が発達していれば、それと同じ度合でそこでは労働の国民的な強度も生産性も国際的水準の上に出ている。」(前出、五八四ページ)

と述べているところからして明らかなように、資本主義的商品生産が発達していればいるほど、その国の労働の強度と生産性——労働の熟練はその主要な要因である——の国民的平均度は、他の国のそれにくらべてより高い、といわなければならない。一国内ではすべての個別的労働は社会的平均的の強度および熟練をもつ労働に還元されてはじめて、社会的労働と成り一

定量の価値に対象化して社会的に妥当するものとなるのであるが、国際間では、それぞれの国の国民的平均労働に還元されてすでに社会的労働と成り一定量の価値に対象化しおわっているのであって、それらの国民的労働が一度「世界的平均労働」なるものに還元されてはじめて国際的に価値を形成するものになるといふことはない。世界的平均単位を基準にしてはかったそれぞれの国民的平均労働の強度および熟練（生産性）の高さに応じて、たとえば強度の国際的高さが4、2および1の各国民的労働をもつA、B、C三国についてみれば、A、B、Cのそれぞれの一労働時間は、そのまま国際的にはそれぞれ価値量は4、2および1として妥当する。また、労働の熟練（生産性）についても、その国民的平均労働の国際的高さがそれぞれ4、2および1であるA、B、C三国においては、それぞれの一労働時間は、国際的にはそのままそれぞれ4、2および1の価値量に対象化するものとして妥当するのである。強度については、還元の基準こそちがえ、一国内でも価値量は、右の例についていえば、それぞれ4、2および1であつて、それらの相互関係は同じものとしてあるが、これにひきかえ労働の熟練（生産性）については、一国内ではまったく異なっている。いずれにせよ、一国内では社会的・平均的労働への還元を通じて社会的労働と成り、それによつてはじめて一定量の価値に対象化することができるのに反し、国際間ではそれぞれの国の内部においてすでに社会的労働への還元がおこなわれ、「階段」を成しているそれぞれの国の労働の強度および熟練（生産性）の国際的な高さに応じて、そのまま直接に一定量の価値として妥当するものである、という点に、まさしく「国際間における価値法則の修正」といわれることの根拠があるのである。このことはすでに前稿においても示唆すみのところであるが、労働の強度および熟練（生産性）の国民的平均が、資本主義的商品生産の発達の度合いに応じて、一つの「階段」を成しているということを説明するにあつて、それとの関連でここにいま一度正確に説明し直したのである、それというのも、「国際間における不等価値交換」こそが「価値法則の修正」であるとすると超論理的・超俗物的な「国際価値論」なるものが、この国では相変わらず盛行をきわめているという実情があるからである。

なお、右の価値規定において、注意しなければならないのは、「使用価値の生産に社会的に必要な労働時間」ということの内容である。マルクスは、この「社会的に必要な労働時間」を説明するために、つぎのような例をあげている。

「たとえば、イギリスで蒸気織機が採用されてからは、一定量の糸を織物にするためにはおそらく以前の半分の労働で足りたであろう。イギリスの手織工はこの転化に実際は相変わらず同じ労働時間を必要としたのであるが、かれの個別的労働時間の生産物は、いまではもはや半分の社会的労働時間を表わすにすぎなくなり、したがって、それ以前の価値の半分に低落したのである」(前出、五三ページ)。

いうまでもなく、これは、「現存の社会的・標準的な生産諸条件」が変化したことによる価値の大きさの変化を示したものである。労働者・手織工の投下する人間の労働は質量ともに変わりはないが、社会的・標準的な労働手段が手織機から蒸気織機に移ったことによって、労働の生産力は増大し、同じ分量の労働が二倍の量の生産物に対象化することになったため、一単位当りの生産物・織物の価値は必然的に半分に低落することになったのである。ただ、この例を読んであとに残る疑問は、たとえば当然織物の価値の中にふくまれるべき糸の価値や手織機および蒸気織機の価値移転分がまったく捨象されている点である。これを改めて言い直すならば、マルクスは価値規定において、何故に生きた労働だけをとりあげ、生産手段に対象化されている過去の労働をここで取り上げることをしていないか？ という問題である。この問題についてわれわれはすでに拙稿『人間の労働の経済学的考察(八)』(本誌第二十九巻第二号、一二九—一三三ページ参照)において、生産手段の価値も生産物の中にふくまれるが、生産物・商品の価値を生きた労働に結びつけて価値規定を明らかにするために、たんに移転するにすぎない生産手段の価値部分を捨象する必要があること、しかし、こうした論理的方法によって価値を生きた労働に結びつけて価値規定を明らかにしたあかつきには、今度は、生産物・商品の価値は、労働者の生きた労働の対象化した価値と過去の労働の対象化としての生産手段の価値からの移転分との和として、つまり、生きた労働と過去の労働とから成るものとして、その「生産に社会的に必要

な労働時間」をより正確にとらえなければならぬ、ということの詳細に説明しておいた。だが、ここでは、さらに、いまひとつ別の面からこの問題を考察しておく必要がある。それは、単純商品生産の段階における生産手段の意義と役割という面について掘り下げてとらえておかなければならぬ、ということである。

三

単純商品生産の段階では、直接的生産者は個別的労働者であつて、かれは、数世紀ものあいだ進歩することなく伝承されてきた手工的道具を用いて、伝来の手工的作業によつて、個別的に生産をおこなうのであつて、その小規模な手工的生産手段もまたかれ自身の過去の労働によつて作りだされたものが大部分である。したがつて同じ種類の生産物「商品をつくるための手工的生産手段は、原料といい、労働手段といい、どの直接的生産者にあつても、いづれも同じ性質の小規模のもので、その間にほとんど差違はない。こういう状態のもとでは、手工的な小規模の生産手段にふくまれた過去の——同一の個別的生産者自身の——労働のうち、生産物「商品に移転する部分はきわめて少量であつて、生きた労働部分にくらべればとるにたりないものといえよう。

要するに、直接的生産者「私的所有者によつておこなわれる単純商品生産のもとでは、生産手段そのものが同じ直接的生産者の労働によつてつくられたかもししくはかれの労働生産物とひきかえに入手した他人の労働生産物であり、しかも、それらはすべて小規模であつて旧来からの伝来の不変の形をひとしくとつていて、それから生産物に移転する価値部分もきわめて小さいものであるという実際の事情を考慮して、マルクスは、一商品の価値はその生産に社会的に必要な労働時間によつて規定されると述べているのであつて、この生産に必要な労働時間のなかには、厳密

にいえば、生きな労働とすでに生産手段に対象化している過去の労働とがふくまれている、というべきなのである。しかし、単純商品生産のもとでの単純商品として商品を考察する最初の論究段階においては、価値規定を明確にうちだすためにも、また同じ直接的生産者「私的所有者の人間労働力の支出にもとづくもの」として生きた労働と過去の労働の物化との対立がまったく存在しないという関係のもとでの労働のあり方を明らかにするためにも、ここにおいては、たんにある労働生産物「商品を生産するための労働——厳密には、その生産のための生きた労働——という表現が採られているのである。商品生産が必然的に発展をとげ、単純商品生産が資本主義的商品生産というより高い段階に移ったときには、右に述べたような事情は根本的に変化をとげる。すなわち、私的生産者「私的所有者は非労働者に移ったとき、資本家として労働者「非所有者に対立し、資本家の所有する生産手段は大規模・社会的なものとなりその価値もはるかに大きなものとなり、しかも、これらの生産手段は、労働者「賃銀労働者にたいして対立するばかりでなく、そこにふくまれた過去の労働は労働者の生きた労働を吸い取るもの、権威をもって労働者を駆使する他人の (Fremd) 力を体现するものとなる。それゆえ、こうしたより高い段階においては、生産手段から労働生産物に移転する価値部分は、労働者の生きた労働によって新たに付加された——そして資本家のものとなる——価値部分とその性質をまったく異にし、前者の価値部分は後者の価値部分を吸収するもの、また後者の不払部分をできるだけより多くするための元本もとともいうべきものになるのであって、ここでは、生産手段にふくまれた価値とそれから生産物に移転する価値部分は明確に区別してとりあげられなければならないのである。

マルクスが、右に述べたような、商品生産の二つの歴史的段階における生産手段のもつ意義と役割との相違を念頭において、生産物「商品の価値規定の説明を、それぞれの段階に対応させてちがった形でおこなっていることは、つ

にかかげる『資本論』第一巻のうちの二つの叙述を読みあわすことによって、はっきりとうかがうことができるのである。

第一の例——第一章第二節「商品に表わされる労働の二重性」から。

「使用価値としての上着やリンネルは、目的を規定された生産的活動と布や糸との結合物であり、これに反して価値としての上着やリンネルは単なる同種の労働凝固であるが、それと同じように、これらの価値に含まれている労働も、布や糸にたいするその生産的作用によってではなく、ただ人間の労働力の支出としてのみ妥当するのである。裁縫労働や織物労働が使用価値としての上着やリンネルの形成要素であるのは、まさに裁縫労働や織物労働の互いにかがった本質によるものである。裁縫労働や織物労働が上着価値やリンネル価値の実体であるのは、ただ、裁縫労働や織物労働の特殊な質が捨象されて両者が同じ質を、人間的労働という質をもっているかぎりでのことである。

しかし、上着やリンネルは価値一般であるだけではなく、特定の大きさの価値である。そして、われわれの規定によれば、一着の上着は一〇エレのリンネルの二倍の価値がある。それらの価値量のこのような相違は、どこから生ずるのか？ それは、リンネルは上着に比べて半分の労働しか含んでおらず、したがって上着の生産にはリンネルの生産に比べて二倍の時間だけ労働力が支出されなければならないということから生ずるのである」（全集、第三巻、五九—六〇ページ）。

みられるように、マルクスは、使用価値の説明にあたっては、「合目的な生産的活動と布や糸との結合物」と述べて、そこには、人間労働力のほかに布や糸という生産手段が生産の要因としてなければならないことを明らかにしている。ところが、労働生産物・商品の価値を問題とするときには、布や糸——そしてまた、針、アイロン、裁縫台

や織機といった労働手段——は問題にされず、ただ裁縫労働と織物労働だけが、つまり生きた労働だけが問題にされている。

第二の例——第五章第二節「価値増殖過程」から。

「労働そのものと同様に、ここでは原料や生産物もまた本来の労働過程の立場から見るとはまったく違った光のなかに現われる。原料はここでただ一定量の労働の吸収物として認められるだけである。実際、この吸収によって、原料は糸に転化するのであるが、それは、労働力が紡績という形で支出されて原料につけ加えられたからである。しかし、生産物である糸はもはやただ綿花に吸収された労働の計測器ではない。もし一時間に一ポンドの綿花が紡がれるならば、または一ポンドの糸に変えられるならば、一〇ポンドの糸は、吸収された六労働時間を表わしている。今では、一定量の経験的に確定された量の生産物が表わしているものは、一定量の労働、一定量の凝固した労働時間にほかならない。それらはもはや社会的労働の一時間分とか二時間分とか一日分とかの物質化されたものではないのである。

労働がほかならない紡績労働であり、その材料が綿花であり、その生産物が糸であるということは、労働対象そのものがすでに生産物であり、つまり原料であるということと同様に、ここではどうでもよいことになる。かりに労働者が紡績工場ではなく炭鉱で働かされるとすれば、労働対象である石炭は天然に存在しているのであろう。しかし、それにもかかわらず、炭層からはぎ取られた石炭の一定量、たとえば一ツェントナーは、一定量の吸収された労働を表わすであらう。

労働力の売りのところでは、労働力の日価値は三シリングに等しいと想定され、またこの三シリングには六労働時

間が具体化されており、したがって労働者の日々の生活手段の平均額を生産するためにはこの労働量が必要だということが想定された。今われわれの紡績工は一労働時間に一磅ポンドの綿花を一磅ポンドの糸に変えたとすれば、六時間では一〇ポンドの綿花を一〇ポンドの糸に変えることになる。つまり、紡績過程の継続中に綿花は六労働時間を吸収するわけである。この六労働時間は三シリングの金量で表わされる。つまり、この綿花には紡績そのものによって三シリングの価値がつけ加えられるのである。

そこで、生産物である一〇ポンドの糸の総価値を調べてみよう。一〇ポンドの糸には、二磅の労働日が対象化されている。二日分の労働は綿花と紡錘量とに含まれており、一日の労働は紡績過程のあいだに吸収されている。同じ労働時間は一五シリングの金量で表わされる。だから、一〇ポンドの糸の価値に相当する価格は一五シリングとなり、一ポンドの糸の価格は一シリング六ペンスとなる」(前出、二〇四—二〇五ページ)。

みられるように、ここでは、生産物「糸の価値のうち、生産手段である綿花と紡錘の価値が移転してふくまれる、ということが明記されている。そして、さきに明らかにされたように、それらの生産手段が労働者の生きた労働を吸収する物であるということも、はっきり示されている。

右の二つの叙述を読みあわすことによって、単純商品生産と資本主義的商品生産とにおける生産手段の意義と役割との本質的差異、したがって生産物「商品の価値規定における生産手段の意味の両段階での根本的なちがいが、明確に浮びあがってくるといえよう。このことはまた、すぐひきつづいて考察されるエンゲルスの単純商品についての説明によっても、その一半は裏付けられているということができるのである。

では、単純商品生産の段階において、右に述べたような、価値を規定する社会的・平均的労働の質、いいかえれば

「社会的平均度の熟練と強度」の人間の労働は、どのような形で実存し、またそのようなものとして人間の意識にのぼるものとなり、そして、これによって規定される価値の大きさは現実にとどのような形で商品生産・交換を支配していたであろうか、つまり、ここでは価値法則はいかに貫徹していたであろうか？

われわれは、こうした問題についてきわめて詳細な説明をあたえているエンゲルスの所論をつぎにかかげることにしよう。これは、エンゲルスが『資本論』第三部への補遺」として著わした労作のうちの最初の「一 価値法則と利潤率」と題する論稿のなかに見出されるものである。この論稿は、これからさき、価値理論の展開において、とりわけ市場価値の範疇の論究のさいに、きわめて重要な示唆をふくむものとして全面的に援用されるはずのものであるが、ここでは、それにさきだつて、単純商品生産にかんするかぎりの叙述部分を——いささか長きに過ぎるうらみはあるが、必要やむをえず——引用してかかげることにしたのである。

「だれでも知っているように、初期の社会では生産物は生産者自身によって、消費され、この生産者たちは、多かれ少なかれ共産的に組織された共同体のなかで自然発生的に組織されている。そこでは、この生産物の余剰を他国人と交換することは生産物の商品への転化の端緒をなすのであるが、それは後代のことであつて、それは初めはただ個々の異種族共同体のあいだだけで行なわれるが、後には共同体の内部でも行われるようになって、共同体が大小の家族集団に分解することに本質的に寄与する。しかし、この分解の後にも、交換を行なう家長は相変わらず労働する農民であつて、この農民は自分の必要物のほとんど全部を家族の助力によって自分の農地で生産し、ただ必要品のほんのわずかな一部分を自分の生産物の余りと引き換えに外から取り入れるだけである。家族は農耕や牧畜を営むだけではなく、それらの生産物に加工して完成消費品とし、ときにはまた自分で手臼で粉をひき、パンを焼き、亜麻や羊毛

を紡ぎ、染め、織り、革をなめし、木造の家を建て、それを修理し、道具や器具をつくり、指し物や鍛冶をすることもまれではない。こうして家族または家族集団は大体において自給自足しているのである。

ところで、このような家族が他者から交換によって手に入れるかまたは買うかしなければならぬはずかばかりのものは、一九世紀の初めまでドイツではおもに手工業的生産の対象から成っていた。すなわち、その製法が農民に知られていなかったわけではけつしてなく、ただ原料が手にはいらぬとか、買った物のほうがずっと優良または安価だとかいう理由だけから農民が自分では生産しなかつた物から成っていた。だから、中世の農民には、自分が交換によって手に入れる品物の製造に必要な労働時間はかなり正確に知られていた。村の鍛冶屋や車大工は農民の目の前で働いていた。仕立屋や靴屋もそうであつて、かれらはわたくしの若い頃にもまだわれわれのライン地方の農家を戸別に訪れて自家産の原料で衣類や靴をつくっていた。農民も、農民に物を売っていた人々も、自分自身が労働者だったし、交換された品物はめいめいの自分の生産物だった。これらの生産物の生産にかかれらにはなにを費やしたか？ 労働であり、ただ労働だけである。道具の補充のためにも、原料の生産のためにも、その加工のためにも、かれらは自身自身の労働力のほかにも支出しなかつた。それならば、かれらはこのようなかれらの生産物と他の労働する生産者の生産物とをそれらの生産物に費やされた労働に比例して交換するよりほかにはどうすることができようか？ その場合には、これらの生産物に費やされた労働時間が、交換されるべき大きさの量的規定のための唯一の適当な尺度だただけではない。そこではおよそこれ以外の尺度はありえなかつたのである。そうでないと言ふならば、農民や手工業者は一方の一〇時間労働の生産物を他方のたつた一労働時間の生産物と取り換えてやるほどばかだつたと思ふのだろうか？ 農民的現物経済の全時代にわたつて、交換される商品量がだんだんそれらに具体化されている労働

量によって計られるようになってくるといふ交換のほかには、どんな交換もありえないのである。この経済様式に貨幣が侵入してくる瞬間から、価値法則（マルクスによって定式化されたそれ、注意！）への適応の傾向は一方ではますます顕著になってくるのであるが、他方ではまたこの傾向がすでに高利貸や財政的搾取の干渉で破られ、平均的に価格と価値とのひらきが無視してもよいほどの大きさになるような期間はすでにかなり長くなってきているのである。

同じことは、農民の生産物と都市手工業者の生産物との交換についても言える。この交換は初めのうちは直接に商人の媒介なしに諸都市の市日いちひに行なわれ、その日に農民は生産物を売ったり仕入れをしたりする。この場合にも、農民に手工業者の労働条件が知られているだけでなく、手工業者にも農民の労働条件が知られている。なぜならば、手工業者自身もまだ一個の農民なのであって、菜園や果樹園を持っているだけではなく、また一片の耕地や一匹か二匹の牛や豚や家禽などをもっていることもひじょうに多いからである。こういうわけで、中世の人々は、それぞれ互いに相手の生産費を原料や補助材料や労働時間についてかなり正確にあとから計算することができたのである——少くとも日常一般に使用する品物についてはそうだったのである。

しかし、このように労働量を基準として行なわれる交換のために、この労働量は、たとえただ間接的相対的ではないにしても、つぎのような生産物の場合にはどのようなようにして計算すればよかったのか？ というのは、かなり長い期間にわたって行なわれ、不規則な中断期間があり、しかも成果が不確実だという労働を必要とした生産物、たとえば穀物や家畜の場合である。まして、計算もできなかった人々の場合にはどうだったのか？ 明らかに、長い時間のかかる、ときには暗やみを手探りするような、ジグザグな接近の手続によるよりほかはなかった。そこでは、人々は、いつもそうであるように、損をしてみではじめて賢くなった。しかし、各人が大体において自分の費用を取り返

さなければならぬという必要は、絶えずくりかえし正しい方向に向かうことを助けた。そして、取引される品物の種類が少くないということも、またそれらの生産の仕方がしばしば数世紀にわたって変わらなかつたということも、目標に達することを容易にした。そして、これらの生産物の相対的な価値の大きさがかなり近似的に確定されるようになるまでには、けつしてそれほど長くはかからなかつたという事は、すでにつぎのような事実だけによつても証明される。すなわち、各一個の生産期間が長いためにこの確定がもつとも困難なように見える商品、すなわち家畜が、最初のほば一般的に承認された貨幣商品になつたという事実である。このような事実を成り立たせるためには、家畜の価値が、すなわち家畜と多数の他の商品との交換の割合が、すでに、比較的異例な、多数の種族の領域で異議なく承認される確定に達していなければならなかつた。そして、たしかに当時の人々は——牧畜者もその取引相手も——自分が費やした労働時間を交換にさいして無等価で与えてしまわないだけの賢さをもつていたのである。それどころか、商品生産の原始状態に近い人間ほど——たとえばロシア人や東洋人——、今日でもまだ、長い粘り強い駆引きによつて自分たちが生産物に費やした労働時間の十分な代償を取りもどすために、より多くの時間を費やすのである。

このような、労働時間による価値規定から出発して、いまや全商品生産が発展し、またそれとともに、『資本論』第一部第一篇で述べてあるような価値法則のさまざまな側面が効力を現わしてくる多様な諸関係が発展し、したがつてまた、ことに、ただそのもとのみ労働が価値形成的であるような諸条件が発展した。しかも、これらの条件こそは、当事者の意識にのぼることなしに自分を貫き通すものであり、骨の折れる理論的研究によつてはじめて日常の実践から引き出すことのできるものであり、したがつて、マルクスも商品生産の本性から必然的に出てくるものとして証明したような自然法則の仕方で作作用するものである。最も重要な最も明確な進歩は金属貨幣への移行だつたが、こ

の移行はまた、労働時間による価値規定がもはや商品交換の表面に目に見えるようには現われないという結果を伴った。貨幣は実的な理解にとっては決定的な価値尺度となった。そして、取引される商品が多様になるにつれて、またそれらの商品が遠い国の産物であることが多くなるにつれて、したがってそれらの生産に必要な労働時間が検証できなくなるにつれて、ますますそうなった。だが、貨幣も初めのうちはそれ自身たいていは外国から来たものだった。貴金属として国内で得られても、農民や手工業者はそれに費やされた労働を近似的に算定することができなかつたし、あるいはまたかれら自身にとっても労働の価値尺度的属性についての意識は貨幣計算の習慣によってすでにかなりぼんやりしたものになっていた。貨幣は民衆の觀念のなかでは絶対的な価値を表わすようになってきた。

ひと言でいえば、マルクスの価値法則は、およそ経済法則というものが妥当するかぎり、単純商品生産の全時代にわたって、すなわち資本主義的生産形態の出現によって単純商品生産が変化させられる時まで、一般的に妥当するものである。それまでは、価格は、マルクスの法則によって規定される価値に向かって引きつけられ、この価値を中心として振動するのであり、したがって、単純商品生産が十分に發展すればするほど、それだけますます、外部の強力的攪乱によって中断されない比較的長い期間の平均価格は、無視してもよい開きの範囲内で価値と一致するのである。こうして、マルクスの価値法則は、生産物を商品に転化させる交換が始まってから一五世紀にいたるまでの期間にわたって、経済的・一般的妥当性をもつのである。ところが、商品交換が現われる時代は、いっさいの書かれた歴史よりも前にあり、エジプトでは少なくとも紀元前二五〇〇年に、おそらくは紀元前五〇〇〇年にさかのぼり、バビロニアでは紀元前四〇〇〇年に、おそらくは紀元前六〇〇〇年にさかのぼるのである。だから、価値法則は五〇〇〇年から七〇〇〇年の期間にわたって支配してきたのである」(マルクス・エンゲルス全集、第二五巻、九〇六―九〇九ページ)。

ここに長々と引用したエンゲルスの叙述は、マルクスが『資本論』第三卷第一〇章「競争による一般的利潤率の平均化 市場価格と市場価値 超過利潤」のなかで、資本主義的商品生産に先きだつ單純商品生産においては、商品は、生産価格つまり費用価格プラス平均利潤で売られるのではなく、生産手段からの移転価値プラス直接的生産者の新たに生みだした価値で売られるということ、厳密に言えば、資本主義的商品の販売価格は生産価格を中心として動くのたいていして單純商品はそれのもつ価値を中心として価格が動くということを説明しているつぎの個所について、「もしマルクスが第三部にもう一度手を入れることができたとすれば、疑いもなくこの個所をもっとずっと詳しく論じたであろう」と述べて、その内容を詳しく解説しているところのものである。

「それだから、価値どおりの、またはほぼ価値どおりの、諸商品の交換は、資本主義的發展の一定の高さを必要とする生産価格での交換に比べれば、それよりもずっと低い段階を必要とするのである。

いろいろな商品の価格が最初まずどのようにして互いに確定または規制されようとも、とにかく価値法則は商品の価格の運動を支配する。他の事情が変わらなければ、商品の生産に必要な労働時間が減れば価格は下がり、この労働時間が増せば価格は上がる。

だから、価値法則による価格や価格運動の支配は別としても、諸商品の価値を単に理論的に、歴史的にも、生産価格の先行者とみなすということは、まったく適切なものである。これは、生産手段が労働者のものである状態について言えることであつて、このような状態は、古代世界でも近代世界でも、自分で労働しており土地を所有している農民のもつて、また手工業者のもつて、見いだされるのである。このことは、われわれが前に述べた見解とも一致している。すなわち、生産物の商品への發展は、別々の共同体のあいだの交換によって生ずるのであつて、同じ共

同体のなかの諸成員のあいだの交換によって生ずるのではない、という見解がそれである。それは、この原始的状态について言えるのと同様に、もっとあとの奴隷制や農奴制にもとづく状態についても言えるのであり、また、手工業の同職組合組織についても言えるのである。といつても、各生産部門に固定された生産手段が容易には一つの部面から他の部面に移転されることができず、したがっていろいろな生産部面のあいだの関係が、ある限界のなかでは、別々の国のあいだかまたは共産的な共同体どうしのあいだの関係のようなものであるかぎりでのことではあるが」(全集 第二五卷、一八六一—一八七ページ、傍点—山本)。

みられるように、マルクスは、資本主義的商品生産における生産価格の法則を説明するために、それに先行する、より低い段階の単純商品生産における価値法則の貫徹様式をいわば対照的に明らかにしているのであるが、しかし、生産価格の問題を一応別としても、ここに引用したマルクスおよびエンゲルスの叙述は、単純商品生産のもとでの商品交換のあり方、したがってまた価値法則の貫徹様式についての説明とみなすことができるのである。そして、このマルクスおよびエンゲルスの明確な叙述によって、われわれがはじめにとらえておいた単純商品生産の特徴がまさしく裏書きされているということを知ることができるのである。

われわれは、さきにおいて生産価格の問題を考究するさいにまた右のマルクスおよびエンゲルスの叙述にたちかえることになるはずであるが、ここでは一応単純商品生産について与えたさきの特徴が裏書きされているという事実を確認するにとどめておき、当面さしあたってこれからの価値理論の展開にそなえて、なおあらかじめ明確にしておくなければならない側面について、必要な説明をしておかなければならない。それは、労働の生産力を規定する諸要因の価値生産における意義の問題である。

四

商品価値の実体を成す社会的・平均的労働が無数の個別的生産者の個別的労働の比較・競争を通じて、その競争のなかで決定され、したがって商品価値の大きさを規定する「社会的必要労働時間」もまたすべての私的・個別的生産者の背後で、かれら自身の競争を通じて決定されざるをえないこと、したがって、価値法則は、私的生産者がその商品の生産過程においてできるだけ労働の生産力を高めるべく努力することを強制するものであること、——これらのごとについては、すでにくりかえし説明がおこなわれた。そこで、ここでは、労働の生産力を高めるためには、どのような方策が必然的に採られなければならないか、労働の生産力の変動を規定する要因としてどういうことが考えられるか？ ということについて検討をしておこう。これらの要因を明確にとらえておくことは、私的生産者による私的利益のための商品生産が、競争の強制法則におされて、どういう方向に、どのように発展をとげなければならないか？ ということを、つまり商品生産の発展方向を見きわめるために、欠くことのできない要件なのである。以下でそれらの要因を考察するにさきだつて、われわれは、まず労働の生産力という言葉そのものの意味をはっきりさせておかなければならない。

労働の生産力とは、さきにみたように、人間主体が担っている人間労働力の支出としての労働がどれだけの生産物を生み出す力があるか、ということを示すものである。労働対象も労働手段も、人間主体の外部にあって主体の活動を媒介する物、死んだ物であつて、人間の主体的活動によつてはじめて生産手段として生かされるのであり、したがつてそれら自身が生産力をもつことはありえない。さきに価値規定について説明したさいに明らかにされた人間的労働

働の質的規定をここにいれて考えれば、労働の生産力という言葉の意味は、より正確にとらえられる。すなわち、同じ密度・強度の人間の労働を等量支出して、それによって生産される生産物の量が增大するのが労働の生産力の増進であり、その生産物量が減少するのが労働の生産力の低下である。さきの場合には、単位商品に対象化する人間の労働の量は減少し、したがって商品価値は低下するが、あとの場合には、単位商品に対象化する人間の労働の量は増加し、したがって商品価値は増大する。同じ強度、同じ分量の労働であるから、労働者自身にとつての負担は、まったく変わらない。労働の強度とちがつて、労働の熟練は、労働者の支出する力の密度にはまったく関係なく、たんに労働の作用度または効率を示すものであるから、これは直接に労働の生産力を規定するものである。そこでつぎに、労働の生産力を規定する要因にたいして、マルクスが、『資本論』第一巻第一章第一節で述べているところをかかげ、これについて簡単な検討を加えることにしよう。

「それゆえ、もしもある商品の生産に必要な労働時間が不変であるならば、その商品の価値の大きさも不変であろう。しかし、この労働時間は、労働の生産力に変動があれば、そのつど変動する。労働の生産力は、多種多様な事情によつて規定されており、なかでもとくに労働者の熟練の平均度、科学とその技術的応用可能性の発達段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模と作用能力とによつて、さらにまた自然諸関係によつて、規定されている」(前出、五四ページ)。

みられるように、ここには労働の生産力を規定するものとして、五つがあげられている。つぎに、そのひとつひとつについて簡単な注釈を加えてみよう。

Ⅰ「労働者の熟練の平均度」——労働の熟練度が労働の生産力を規定するものであることは、すでに述べたところ

であるが、ここで注意しなければならないのは、「平均度」という言葉である。この「平均度」という言葉が示しているのは、ここで労働の生産力が問題となつてゐるのは、私的・個別的労働の生産力ではなくして、社会的・平均的労働の生産力である、ということである。価値を規定するのは、個別的労働ではなく、まさに社会的・平均的労働なのである。⁽³⁾

(3) この、価値を規定する社会的・平均的労働について、マルクスは、同じ第一章の第二節において、

「それは、平均的にだれでも普通の人間が、特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもつてゐる単純な労働力の支出である。もちろん、単純な平均的労働そのものも、国が違ひ文化段階が違へばその性格は違ふのであるが、しかし現に在る一つの社会では与えられてゐる。より複雑な労働は、ただ、単純な労働が数乗されたもの、またはむしろ数倍されたものとみなされるだけであり、したがつて、より小さい量の複雑労働がより大きい量の単純労働に等しいということになる。このような換算絶えず行なわれているということは、経験の示すところである。」(前出、五九ページ、傍点—マルクス)

と述べ、さらに、複雑労働が同じ労働時間内に単純労働にくらべてより大きい価値を生むことの根拠について、同じ第一巻の第五章第二節のなかで、つぎのように説明している。

「社会的・平均的労働に比べてより高度な、より複雑な労働として妥当する労働は、単純な労働に比べてより高い養成費がかかる、その生産により多くの労働時間が費やされる、したがつてより高い価値をもつ労働力の発現である。もしこの力の価値がより高いならば、それはまたより高度な労働として発現し、したがつてまた同じ時間内に比較的より高い価値に対象化される」(前出、二二—二二二ページ)。

ただし、マルクスは、このような高度な労働と単純な労働との、「熟練労働 (skilled labour)」と「不熟練労働 (unskilled labour)」との相違について、注記のなで、それが「一部分は単なる幻想にもとづくか、または少くとも、すでにずっと前から実在的ではなくなつてもはやただ伝統的な慣習のうちに存続するだけの相違にもとづいてゐる」ことを指摘し、さらにつぎのように述べてゐる。これらのマルクスの注意は、われわれが複雑労働または熟練労働と呼ばれるものを問題とするときには必ず念頭においていなければならないものである。

「また一部分は、労働者階級中の或る階層のいっそう絶望的な状態にもとづいている。この状態のためにこれらの階層は自分の労働力の価値を強要する力が他の階層よりも弱いのである。そのうえに偶然的な諸事情が大きな役割を演じて、そのために同じ労働種類が地位を替えることもある。たとえば資本主義的生産の発達している国ではどこでもそうであるが、労働者階級の体質が弱くなり比較的疲れているところでは、一般に、筋力を多く必要とする粗野な労働は、それよりもずっと精密な労働にくらべてより高度な労働に逆転し、後者は単純な労働の等級に下落するのであって、たとえば、イングランドでは煉瓦積み工の労働は綾織工の労働よりずっと高い地位を占めている。また他方では、綿びろうと剪毛工の労働は、多くの肉体的緊張を必要とし、しかもひじょうに非衛生的であるにもかかわらず、「単純な」労働とされている。とにかく、いわゆる「熟練労働」が国民の労働のなかで量的に大きな範囲を占めているものと想像してはならない。……」（前出、二二二ページ）。

□「科学とその技術的应用可能性の発展段階」——科学の発展によって自然物質および自然諸力にかなする知識がいっそう深まれば深まるほど、そして、その知識を実際に生産に応用することがますます可能になればなるほど、これによって労働の生産力がますます増大することは、いまさら言うまでもないところである。この「発展段階」なるものを現実に利用できるものは、すべての資本家でなければならないが、しかし、そのためには、「発展段階」がより高くなればなるほど、それだけより多額の資本を必要とする。資本主義の最高の段階においてこれを独占的に利用するものが、ほかならぬ独占資本であり、これによって飛躍的に増大する労働の生産力を独占して最大限の利潤をふところに入れるのが独占資本であることは、多言を要しない。

ハ「生産過程の社会的結合」——本来生産過程は、個別的にのみ充用される手工的生産手段をもって労働者が個別的に労働するところの、個別的生産過程である。これにたいして、多数の個別的労働者が同時に同じ場所で、同じ生産物の生産のために、同じ指揮のもとに労働するのが、「生産過程の社会的結合」である。この具体的な存在形態は、資本がつくりだした資本主義的生産方法、すなわち、協業であり、その発展した形態としての分業にもとづ

く協業つまりマニファクチュアである。これらの生産方法がいかに労働の生産力を増大させるかということ、
『資本論』第一巻第一章および第二章において詳細に説明されている。

ニ「生産手段の規模と作用能力」——ここでの「生産手段」がとくに労働手段を、そしてそれが手工的道具ではな
くして、大規模な機械および機械体系を指すものであることは、容易にとらえられるところである。資本主義的生産
そのものが機械および機械体系を基本とする大工業を生みだし、これによって社会的労働の生産力を飛躍的に増大さ
せたこと、そしていまなおますます増大させつつあることは、いまさら言うまでもない。マルクスが『資本論』第一
巻第三章に「機械と大工業」をにおいて詳細な論究をおこなっていることの意義を、われわれは十分に認識する必要
があるが、その論究のための布石は、すでにここ、第一章第一節の中に見出されるのである。

以上にあげた要因のうち、ロ、ハ、ニの三つは、資本の規模が大きければ大きいほどそれらをもっともよく利用し
て労働の生産力を高めることができ、したがってそれによって競争のうちかつことができ、それに応じてできるだけ
大きな価値増殖をとげることを保証するものとなる。それゆえ、資本主義的生産が発展すればするほど、資本の競争
はこれら三つの要因を最大限に活用するためにその大規模化をますます競い、ますます大規模な社会的生産過程とと
どまることのない大規模な機械生産を極力推進することになる。ここに述べられたロ、ハ、ニの要因は、資本主義的
生産における競争のあり方とその発展方向をあらかじめ明示するものとして、きわめて重要な意味をもっている考
えなければならぬ。これらにくらべて、資本主義的生産にとってまったく意味をもっているのが、最後に
あげられた「自然諸関係」である。

ホ「自然諸関係」——マルクスは、労働の生産力を規定する諸要因をあげたのちに、その例を説明しているが、そ

れはもっぱら、最後にあげられた「自然諸関係」についての例解である。マルクスがあげているその例解は、「豊作のときと兎作のとき」および「豊かな鉞山と貧しい鉞山」についておこなわれている。「自然諸関係」という言葉そのものに即して考えるならば、その意味するところは、右の例解に示された範囲を超えることはないであろう。しかし、われわれは、さきのハおよびニについて、それが資本主義的商品生産の発展にとって決定的な意義をもつものであることをはっきりとらえたのである。したがって、この「自然諸関係」についても、それが資本主義的生産にとつてどのような意味をもつことができるものか？ ということを考慮してみなければならぬ。そうすれば、この「自然諸関係」が資本主義的生産にとつて、きわめて重大な意味をもつものであることが、はっきりしてくるはずである。「自然諸関係」は、その文字の示すように、資本によって自由にすることのできないもの、いかに大きな資本の力をもつても左右することのできないものである。資本主義的生産にとつて必要不可欠の「自然諸関係」としてもっとも重要な、決定的ともいふべき意義をもっているのは、まさに土地である。一般に土地の位置と豊度は、いかに大きな資本の力をもつても自由につくりだすことはできない。したがって、その土地を排他的に所有すること、つまり土地所有は、資本にたいする克服しえないひとつの制限をなすものである。土地の位置と豊度の恵まれたものは、そこに投下された労働の生産力を増大させ、したがってそこに投下された資本は平均利潤を超える超過利潤を獲得することができるが、しかし、その超過利潤はその土地の有利な位置または恵まれた豊度によって、つまり土地そのものによって生み出されたものとして、土地所有者の手に最終的に帰属する。つまり、土地所有者は超過利潤を地代として取得するのである。

これを要するに、マルクスは、この第一巻第一章第一節において商品の価値の変動を左右するものとしての労働の

生産力の変動を説明し、労働の生産力を規定する諸要因を簡単に列挙しているのであるが、それらの諸要因がこれから先き資本主義的生産の発展にとつてもつ決定的に重要な意義をそれらの簡単な文字の奥にふくませているのである。「生産過程の社会的結合」および「生産手段の規模と作用能力」は、第四篇「相対的剰余価値の生産」の中で展開される資本主義的生産方法の基本的発展傾向を、すなわち、単純な協業からマニュアルチュアへ、マニュアルチュアからさらに機械大工業への必然的發展をすでに示唆しているのであり、最後におかれた簡単な「自然諸関係」は、同じく第三卷第六篇「超過利潤の地代への転化」をはるかに見通して、ここ『資本論』の冒頭にはやくも置かれたまことに美事な布石であると考えられるのであって、われわれは、真に科学的な理論体系とはいかなるものであるかということの把握についての、きわめて貴重かつ適切な素材のひとつをここに見出すことができるのである。

さて、以上、単純商品生産のもとでの価値規定および価値法則のあらましについて必要な説明をおこなってきたので、これを基礎としました出発点として、いよいよ資本主義的商品生産について論究をすすめることにしよう。

五

まずはじめに単純商品生産が資本主義的商品生産に發展し移行することによって必然的に生ずる重要な変化について、簡単に把握しておく必要がある。

単純商品生産においては、生産は直接的生産者およびその家族の生活と生産を支えるためのもの、簡単にいえば自家消費のための単純再生産であり、したがって、生産手段はかれ自身の個別的労働力の支出のためのもの、つまり個別的で小規模なものである。これにたいして資本主義的商品生産においては、生産は最大限の価値増殖をとげるため

のものであり、したがって、生産手段は多数の労働者によってはじめて充用されうる大規模なものとなり、労働力も個別的ではなく多数・社会的なものとなる。さきにあげた労働の生産力の増大を規定する要因としてあげられた「生産過程の社会的結合」と「生産手段の規模と作用能力」は、ここでは資本の大きさに応じて最大限に活用されなければならぬ。

こうした変化にもなつて、資本主義的商品生産においては、価値規定の意義も変化せざるをえない、というよりは、正確に表現すれば、一步進んでより高いものとならざるをえない。さきに単純商品生産における価値規定を考察したときには、直接的生産者の担っている労働力は、無数の、千差万別の個別的労働力であり、したがって、これらの個別的労働は社会的・平均的労働に還元されてはじめて商品価値として対象化しうること、したがって、一商品の価値はそれを生産するのに社会的に必要な労働時間によって規定され、同種の商品は、そのどれをとつても、平均見本としてすべて同一の価値量をもつものである、ということが明らかにされた。だが、資本のもとで生産に従事する労働者は、もはや個別的労働者ではなく、同じ時に、同じ空間で、同じ種類の商品の生産のために、同じ資本家の指揮のもとで働くところの、社会的労働者または結合労働者である。なるほど、かれらの担っている個別的労働力はけつして同一ではなく千差万別であるが、しかし、資本のもとで共同的労働に結びつけられて機能するときには、個別的労働力として発現するのではなく、社会的・平均的労働力として発現することになるのである。マルクスは、『資本論』第一巻第一章「協業」——これは、さきに述べた「生産過程の社会的結合」にあたるものである——のなかで、この「変化」をつぎのように説明している（……は中略部分）。

「価値に対象化される労働は、社会的平均質の労働であり、したがって平均的労働力の発現である。ところが、平

均量というものは、つねにただ同種類の多数の違った個別量の平均として存在するだけである。どの産業部門でも、個別的労働者、ペーターやパウルは、多かれ少なかれ平均労働者とは違っている。この個別的偏差は数学では「誤差」と呼ばれるものであるが、それはいくらか多数の労働者をひとまとめにしてみれば、相殺されてなくなってしまう。有名な詭弁家で追従者のエドモンド・パークは、かれが借地農業者としての実際経験から知るところでは、五人の農僕というような「小さな一組について見ても」すでに労働のいっさいの個人的な相違はなくなってしまう、イギリスの壮年期の農僕の任意の五人をひとまとめにしてみれば、他の任意の五人のイギリスの農僕に比べて同じ時間ではまったく同じだけの労働を行なう、とさえ言っている。それはとにかくとして、同時に働かされる比較的多数の労働者の総労働日とその労働者数で割ったものが、それ自体として、社会的・平均的労働の一日分であるということとは、明らかである。一人の一労働日を、たとえば一二時間としよう。そうすれば、同時に働かされる二人の労働者の一労働日は一四四時間の一総労働日となる。そして、二人のうちの各人の労働は多かれ少なかれ社会的・平均的労働とは違っているかもしれないし、したがって各人が同じ作業に要する時間はいくらか多かつたり少かつたりするかもしれないが、それにもかかわらず、各個人の一労働日は、一四四時間の一総労働日の一二分の一として、社会的な平均質をもっている。しかし、二人を働かせる資本家にとっては、労働日は二人の総労働日として存在する。各個人の労働日は総労働日の可除部分として存在するのであって、そのことは、二人が互に手を取り合って労働するのか、それともかれらの労働の全関連はただかれらが同じ資本家のために労働するということだけにあるのか、ということにはまったくかわりがないのである。これに反して、もし二人の労働者のうちの二人ずつがそれぞれ一人の小親方に使われるとすれば、各個の親方が同じ価値量を生産するかどうか、したがって一般的剰余価値率を実現す

るかどうかは、偶然となる。そこには個別的な偏差が生ずるであろう。……だから、価値増殖一般の法則は、個々の生産者にとっては、かれが資本家として生産し多数の労働者を同時に充用し、したがってはじめてから社会的・平均的労働を動かすようになったときに、はじめて完全に実現されるのである」(前出、三四二—三四三ページ)。

みられるように、多数の労働者の共同的労働つまり結合労働によって、個別的労働者の労働が社会的・平均的労働の性格を必然的に帯びるものとなること、したがって、資本主義的生産においては、その資本主義的生産方法そのものによって、すでに価値を規定する社会的・平均的労働は与えられたものとしてあるということが、明確に説かれていいる。ここでは、各個別的労働の社会的・平均的労働への還元は、資本主義的生産過程そのものの内部ですでに現実に行なわれており、そのまま価値の大きさを規定するものとなっているのであって、市場における生産物・商品の交換においてはじめて社会的・平均的労働への還元がおこなわれ、したがってまた価値の大きさの規定が確定するということはない。だが、それと同時に、生産過程そのものの内部における社会的・平均的労働へのいわば還元の完了ということとは、商品の価値規定にまったく新たな問題を生み出すものとなったのである。

資本主義的商品生産は、単純商品生産とちがって、できるだけ大きな価値増殖を目指すものであり、そのために大量の資本を投下して、多数の労働者を雇い、大規模な生産手段に結びつけて、労働の生産力を大いに高め、生産物・商品の単位当り生産費・価値をできるだけ小さくすることに努力する。労働の生産力を高めるために必ず利用されなければならぬのは、さきに見た「生産過程の社会的結合」と「生産手段の規模と作用能力」との二つの要因である。資本の規模が大きくなるにつれて労働対象(原料)および労働手段の規模もより大きくなり、生産物・商品の価値に占める比重も、単純商品生産の場合のように無視しうるものでなくなるばかりか、しだいにより大きくなり、し

かも労働者の労働を吸収するための死んだ生産要素としてますます大きな意味をもってくる。だが、右の二つの要因の作用範囲は、投下資本の額の大きさによって異なり、資本がより大規模であればあるだけ、これら二要因をフルに活用することが可能となり、したがって単位生産物に商品に対象化する社会的・平均的労働の量はそれだけですますます小さくなるのである。この間の事情を説明しているマルクスの叙述を『資本論』第一巻の中から引いてみてみよう。念のため申しそえておけば、ここでの「一労働時間」といわれるものは、さきに明らかにしたようにすでに社会的・平均的労働への還元が完了しているところの労働である。

「一労働時間が六ペンスすなわち半シリングという分量で表わされるとすれば、一二時間の一労働日には六シリングという価値が生産される。与えられた労働の生産力ではこの一二時間に一二個の商品がつくられると仮定しよう。各一個に消費される原料その他の生産手段の価値を六ペンスだとしよう。このような事情のもとでは一個の商品は一シリングになる。すなわち、生産手段の価値が六ペンス、それを加工するときに新しくつけ加えられる価値が六ペンスである。いま、ある資本家が、労働の生産力を二倍にすることに成功し、したがって一二時間の一労働日にこの種の商品を一二個ではなく二四個を生産することができるようになったとしよう。生産手段の価値が変わらなければ、一個の商品の価値は今度は九ペンスに下がる。すなわち、生産手段の価値が六ペンスで、最後の労働によって新しくつけ加えられる価値が三ペンスである。生産力が二倍になっても、一労働日は相変わらずただ六シリングという新価値をつくりだすだけであるが、この新価値は今度は二倍の生産物に割り当てられる。したがって、各一個の生産物には、この総価値の一二分の一ではなく二四分の一しか、六ペンスではなく三ペンスしか割り当たらない。または、同じことだが、生産手段が生産物に転化するとき、生産物一個につき、今度は以前のようにまる一労働時間ではなく

たった半労働時間が生産手段につけ加えられるだけである。この商品の個別的価値は、いまではその社会的価値よりも低い。すなわち、この商品には、社会的平均的条件のもとで生産される同種商品の大群に比べて、より少ない労働時間しかかからない。一個は平均して一シリングであり、言い換えれば、二時間の社会的労働を表わしている。変化した生産方法では、一個は九ペンスにしかならない。言い換えれば、一労働時間半しか含んでいない。しかし、商品の現実の価値は、その個別的価値ではなく、その社会的価値である。すなわち、この現実の価値は、個々の場合にその商品に生産者が実際に費やす労働時間によって計られるのではなく、その商品の生産に社会的に必要な労働時間によって計られるのである。だから、新しい方法を用いる資本家が自分の商品を一シリングというその社会的価値で売れば、かれはそれをもその個別的価値よりも三ペンス高く売ることになり、したがって三ペンスの特別剰余価値を実現するのである。」(前出、三三五—三三六ページ、山本—傍点)。

みられるように、ここには同じ種類の商品について、個別的価値と社会的価値という、二つのちがった価値が示されている。さきに単純商品生産についてみたときには、個別的必要労働時間と社会的必要労働時間との二つがあったが、しかし、価値としては、社会的必要労働時間によって規定されたものがあつただけで、すべて同種の商品は、いずれも「平均見本」として、同じひとつの価値をもっているものとされたのである。ここでは、無数の個別的労働を社会的・平均的労働に還元することによってはじめて商品価値を形成するものとなることが問題であつたとすれば、ここ、資本主義的商品生産においては、多数の労働者の結合労働による社会的・平均的労働への事実上の還元をふまえて、それぞれ生産方法を異にする各個別的資本によって生産される同種商品の個別的価値の——競争を通じての——平均としての社会的価値が問題となるにいたつたのである。さきには、個別的労働の社会的・平均的労働へ

の還元が問題であったとすれば、このより高い発展段階では、個別的価値の平均価値への、いいかえれば社会的価値への「均等化」が問題となっているのであって、前者の規定を踏まえてはじめて後者の規定が妥当するものであること、前者を基概として後者の発展形態がはじめて存在するものであることは、いまや明白である。

資本主義的商品生産は、このようにして、これからは、個別的価値と社会的価値との関係をひとつの軸として、競争のうちに、発展をとげることになるのであって、これにより、価値規定と価値法則は、いよいよより複雑な形態をとって現われることになるのである。

(未完)

(一九八〇・六・二三)